

研究区分	教員特別研究推進 教育推進
------	---------------

研究テーマ	European Studies の研究ツール開発に関する研究 (6)				
研究組織	代表者	所属・職名	国際関係学部・教授	氏名	栗田 和典
	研究分担者	所属・職名	国際関係学部・教授	氏名	剣持 久木
		所属・職名	国際関係学部・教授	氏名	前山 亮吉
		所属・職名	経営情報学部・教授	氏名	上野 雄史
		所属・職名	国際関係学部・准教授	氏名	小窪 千早
		所属・職名	国際関係学部・准教授	氏名	小谷 民菜
		所属・職名	国際関係学部・准教授	氏名	佐藤 真千子
		所属・職名	国際関係学研究科・准教授	氏名	浜 由樹子
		所属・職名	国際関係学部・准教授	氏名	マティアス・ファイファー
		所属・職名	国際関係学部・准教授	氏名	堀内 賢志
		所属・職名	国際関係学部・准教授	氏名	宮崎 晋生
		所属・職名	国際関係学部・准教授	氏名	森 直香
		所属・職名	国際関係学部・准教授	氏名	米山 優子
	所属・職名	国際関係学部・講師	氏名	石川 義道	
発表者	所属・職名	国際関係学部・教授	氏名	栗田 和典	

講演題目
European Studies の研究ツール開発に関する研究 (6)
研究の目的、成果及び今後の展望
<p>【目的】 本研究の目的は、国際関係学研究科附置の広域ヨーロッパ研究センター（Wider Europe Research Center）の研究活動の成果を、国際関係学部および国際関係学研究科の教育に資するものへと展開することである。</p> <p>「広域ヨーロッパ」はアフリカおよび南北アメリカとともに環大西洋世界を構成し、16世紀の第一次グローバル化からアジア太平洋地域と構造的な一体性をたもってきた。また、そのなかで諸地域や国家が現在に至るまで集塊化と流動化をくり返し、多様でありながら一体をなす地域世界である。「広域ヨーロッパ」という対象にアプローチするには、国際関係論をはじめ、政治学、経済学、文化研究、言語学、文学研究、歴史学など、さまざまな研究分野の成果を活用することがもとめられ、研究の初期にある学生にたいしてその入り口を示すことが重要である。</p> <p>【成果】 2023年度は6年計画の第六年＝最終年度であった。過去5年間の取り組みを踏襲し、年度計画では、研究分担者が報告する研究会、および外部機関の研究者等を招聘する特別講義、ワークショップ、シンポジウムの開催、ウェブサイトに登載した教育資料の充実、国内外の教育機関との情報交換、合同ゼミ学生発表会、および成果のとりまとめをウェブサイトに登載することなどをあげた。オンライン会議システムを利用することで、国外ならびに国内の遠隔地から講師の招聘が可能になり、国際交流委員会などとの共催をふくめて6件（連続講義は1件とした）の特別講義・セミナーを開催できた。学部内の6ゼミの参加を得て12月に開催された合同ゼミ学生発表会では、ハイブリッド形式によって遠隔からのコメントをリアルタイムで共有できた。昨年度について、客員研究員の顕著な参加があり、学部の客員教員でもあったギン・クット氏（ボアジチ大学）が研究会の発表者、特別講義の講師、セミナーでの問題提起者をつとめた。2023年2月トルコ・シリア地震の被災にたいする支援活動をセンターの研究員、留学生、一般学生が積極的に担ったことは、研究と社会貢献をむすびつける経験となった。また、センターにあらたに文学研究を主とする研究員、客員研究員を迎え、研究会を開催した。人びとの中長期的な生活文化に目を向けた研究も継続中である。</p> <p>【展望】 本研究の直接の成果となる研究ツールの作成の準備は、今年度もまた卒業研究や修士論文にとりくむ学生の傾向および学会動向の把握を継続し、かつそれにとどまった。合同ゼミ学生発表会で提示されたテーマにはジェンダーやパブリック・ヒストリ、障がい学生教育などがあり、学生の傾向と学会動向とが同期していた。研究ツールの構成原則は、①基本的な事実や先行研究における共通の了解事項を説明すること、②その事実や事項にたいする複数の議論の要点を示すこと、③複数の視点から考察をうながす問いをみちびくこと、である。成果の公開は不十分なままであり、6年計画を1年延長して公開できるまとめをおこなう。</p>